

# 本谷有希子の戯曲における 自意識過剰な人物たち

—「乱暴と待機」、「ファイナルファンタジックスーパー  
ノーフラット」、「幸せ最高ありがとうマジで!」を中心に—

横尾 みゆき

## 一、はじめに

本谷有希子は、劇作家・演出家、小説家活動で注目を浴び、近年期待される若手作家の一人である。メディアへの登場も増え、数々の賞を受賞、または候補にノミネートされている<sup>1</sup>が、彼女はもともと女優を目指し上京した。一九九八年、地元石川県の高校を卒業後、演劇学校 ENBU セミに入学し、「劇団大人計画」の主催者、松尾スズキのクラスに入り、彼に師事した。しかし、「自意識が飼いならせ」<sup>2</sup>演技に集中できなかった本谷は、女優としての自分に見切りをつけ、台本を書くようになった。そして、その台本が松尾に認められたことで、彼女は劇作家としてのスタートを切り、二〇〇〇年に「劇団、本谷有希子」を立ち上げる。「劇団、本谷有希子」は専属の俳優を持たないプロデュース・ユニットとして活動し、公演のたびにオファー、もしくはオーディションを行い、台本は役者が決まってからあて書きするというスタイルを貫いている。旗揚げ公演「腑抜けども悲しみの愛を見せろ」(二〇〇〇年)の評判は散々であったが、その後は「女の病気シリーズ」と題し、女性もちやすい性質に注目した作品<sup>3</sup>を描き、公演を行うごとに観客も増えていった。そして、二〇〇四年に上演した「腑抜けども悲しみの愛を見せろ」(再演)が評価されて以来、二〇〇七年に鶴屋南北戯曲賞、二〇〇九年には岸田國士戯曲賞を受賞、続いて芥川賞や三島賞にノミネート、二〇一一年には野間文芸新人賞を受賞と今や破竹の勢いである。

しかし、本谷作品の先行研究は少なく、二〇一一年「群像」一二月号に田中弥生による「本谷有希子の荒事的表現」という本谷の小説についての評論が発表されたが、その他の記事は小説の創作合評や本谷に対するインタビューがほとんどである。たまに、上演された舞台に対する個別の批評が演劇雑誌「テアトロ」に載ることがあるが、本谷の戯曲全般について研究されたものはまだ発表されていないのが現状だ。

そのような本谷の戯曲には、必ず「自意識に絡め取られた妄想過多な人間」<sup>4</sup>が登場する。これは劇団、本谷有希子公式 WEB SITE に、劇団の紹介として記載されている語句だが、本谷自身の言葉かは明らかでない。しかし、彼女は「現代の肖像 本谷有希子 劇作家」<sup>5</sup>のインタビューの中で中学生の頃に通訳を目指していたが「自意識が邪魔して英語が喋れ<sup>6</sup>」なかった、あるいは女優を目指すも「自意識を飼いならせ<sup>7</sup>」ず見切りをつけた等、人生の節目に自分の自意識と向き合ってきたと語っており、この言葉が本谷のものであると考えてよいだろう。

このような本谷の描く過剰な自意識が生みだすのは、家族をはじめとして現れた人間関係における関係性の病であり、他者とうまく関係が結べない人物たちの姿である。本稿では本谷の戯曲における人間関係形成の方法、そして登場人物たちの思考のベースとなっている自意識の表れ方を明らかにしたい。とくに、本谷の初期作品と現在の作品では人間関係の結び方、ベースとなっている病の質が変化してきており、それに伴いつつ登場人物たちの思考も少しずつ変化していく。従って、ここでは本谷の仕事の流れにおいて、人間関係の結び方が大きく変化する経緯が辿れる作品、すなわち『乱暴と待機』（『せりふの時代 冬号』二〇〇五年）、『ファイナルファンタジックスーパーノーフラット』（『せりふの時代 秋号』二〇〇七年）、『幸せ最高ありがとうマジで！』（講談社、二〇〇九年）の三作品を比較することによって、それぞれの作品に登場する人物たちの持つ思考・行動の変化と人間関係形成の変化を中心に、本谷の描く人物たちの自意識の変移する跡を明らかにしていきたい。

## 二、登場人物の持つ思考

本谷作品に登場する人物たちは、うまくコミュニケーションを図れない。その場の空気を読むことや、相手の気持ちを考えること、考えたとしても一方的に決めつけることしかできず、独りよがりの状態になるために、会話や関係が成り立たない。かろうじてコミュニケーションが図れたとしても家族や同居している特定の相手であって、人間関係の幅の狭い、社会性の低い人間として設定されている。

彼らがうまくコミュニケーションを図れない理由としては、相手や自分自身に対し過剰な要求を持っていることが挙げられる。つまり、本谷の戯曲には<他者・社会への要求>、<自分自身への要求>が極端に強い二種類の人間が必ず登場するのである。すなわち要求が過剰なあまり、彼らは感情にのまれ、偏った判断・言動をとってしまう。その自他に対する過剰な要求がコ

コミュニケーションを妨げ、人間関係形成の邪魔をし、ひいてはこのような独りよがりの状態が、互いに依存しあうことでしか関係を結べない関係性の病を引き起こしている。

例えば、〈他者・社会への要求〉が強いタイプは“～のせいで…なんだ”、“私を特別扱いすべきだ”と、他者に責任を転嫁したり、他人から見える自分が良いものになるように他人に強要する。この要求を果たすことに躍起になっている人物たちは、他人や社会に過剰に要求を押し付け、自分の責任を果たさない。

〈自分自身への要求〉が強いタイプは“～のために…しなければならない”、“私はこうあるべきだ”など、必要以上に自分に厳しくあったり、責任の主体を自分に持って行く。そして〈他者・社会への要求〉が強いタイプの要求を満たす形で、自分自身への要求を持つ場合は共依存関係に陥り、〈他者・社会への要求〉が強いタイプの言いなりになってしまう。

以下ではこの分類を元に、『乱暴と待機』、『ファイナルファンタジックスーパーノーフラット』、『幸せ最高ありがとうマジで!』の三作品の登場人物たちの見せる二つのタイプの過剰な要求の表れ方の変遷を追跡していく。

### ①「乱暴と待機」

英則と奈々瀬は幼馴染である。成長するに従い、陰鬱な性格になっていく英則と、美しく成長していく奈々瀬だったが、奈々瀬は学生時代に壮絶ないじめに遭い、人からいらつかれないよう病的なまでに気を遣う性格になってしまった。そして、自分の人生が思うようにいかない英則は、奈々瀬が自分に対して何かしたために人生が狂ったと逆恨みし、その考えに固執する。しかし、奈々瀬に何をされたのかを具体的に語ることはできない。一方、奈々瀬も英則の主張を積極的に受け入れ、理由もわからないまま「責任をとらなければ」と彼に尽くす。英則が「今まで人類がしてきた中で一番酷い復讐」を思いつき次第、すぐに実行できるようにと、ふたりは同居生活をスタートする。そこへ英則の同僚の番上と、その恋人金森梓が入り込むようになり、二人の世界の均衡が崩れていく。番上は奈々瀬の「誰にも嫌われたくない」という性質につけ込み、肉体関係を持つ。そして、英則は二人の行為を屋根裏から覗き続ける。しかし、その現場を梓に見られてしまい、英則と奈々瀬は同居を解消することになる。奈々瀬を失いたくない英則は自ら命を絶つことで奈々瀬が一生、自分を責めて生きていくという「今まで人類がしてきた中で一番酷い復讐」を実行するが、両手の切断だけで終わった。そして「本当は、ずっと油絵が描きたかったんだ、俺。」「お前のせいだよ。」と語り、

一緒にいるための新しい理由を作り出し、再び同居生活をスタートさせる。  
これらを鑑みて、英則・奈々瀬の人物的特徴を確認していこう。

「俺の人生は（奈々瀬によって）狂った」

「（奈々瀬に何か）された、たぶん。でもよく覚えてない」

「（大切なものは）失ってから気づくだろ！ そうだったんだ！ 俺はそうだった！ だから……俺はあいつを許さないよ。」<sup>8</sup>

これは金森梓に復讐の理由を尋ねられた時の英則のセリフである。彼は奈々瀬に何をされたかは覚えていないが、原因は必ず奈々瀬にあると主張する。実際は何の関係もないが、英則の中では、奈々瀬によって人生が狂ったという部分だけが大きくなり、奈々瀬に復讐することに固執しなければ耐えられないような精神状態となっている。

一方、奈々瀬は誰にも嫌われたくないという思いが強すぎるあまり、どんな要求にでも応えようとし、嫌われないために常に独自のアンテナをはって予防している。例えば、番上が二人の家を訪ねてきた際、英則が留守だったために帰ろうとした彼に、「だって初対面なのに謝らせたりしちゃって、絶対イラつきましたよね。だからお金…」とお金を渡そうとしたり、いきなり穿いていたスウェットのズボンを胸まで上げておかしな恰好になり、番上には「気を遣わせた私が直前で「そういうつもりじゃなかった！」とか言って、番上さんに恥をかかせるわけにはいかないじゃないですか。そんなの、誤解させた時点で私の責任っていうか…」と自分を女性として意識されないようにとった行動だと説明する。しかし、その気遣いが仇となり、番上に「誤解させた分だけ責任をとるって言ってたよね」と押し倒される。奈々瀬はそんな番上を拒めず、関係を持ってしまう。彼女は、他人に嫌われることを異常なまでに恐れ、自分が嫌われてしまうことに耐えられず、相手の言いなりになる。

実際には英則と奈々瀬は互いに想い合っているのだが、それを口にするのではない。英則が自分の人生がうまくいかないことを奈々瀬のせいにするのも、奈々瀬がそれを積極的に受け入れて彼に尽くすのも、一緒にいたいためである。英則・奈々瀬は互いに好きあっているにもかかわらず、実際と異なる理由を作り出し、一緒にいるためのお膳立てをしなければ、うまく人間関係を形成することができない。そして英則は、「奈々瀬が自分の人生を狂わせた」と妄信することで、うまくいかない、耐えられない現実から逃れようとし、奈々瀬は人から好かれるために自分を偽り、相手の要求に合わせた行

動をとり、依存し合っている。そして共依存関係が破綻しても、また非現実的な新しい理由を作り出し、共依存関係を成立させる。奈々瀬は、自分を犠牲にすることで英則に尽くしているが、彼女は英則と一緒にいるための方法をそれしか持たない。主体性のない奈々瀬だが、自己犠牲は彼女が唯一“自分のため”に自己決定し、とった行動となっている。

英則は自分の人生がうまくいかないことを、具体的な理由が挙げられないまま、すべて奈々瀬のせいにし、奈々瀬もそれを自分の責任とし、「責任をとらなければならない」と積極的に受け入れる。英則はく他者・社会への要求>が強いタイプ、奈々瀬はく自分自身への要求>が強いタイプといえる。

## ②「ファイナルファンタジックスーパーノーフラット」(以下「ファイナル」と略記する)

トシローはインターネットの掲示板でユクと名乗る縞子と出会う。ユクは彼にとって理想の女性であり、トシローは初デートのために親に遊園地を買い取らせるほど彼女にのめりこんでいた。しかし、初デートで現実の縞子と会い、彼が好きになったユクは縞子が演じていた人格であったことを知る。その事実で絶望したトシローは自分の中で、自分とのデート中にユクが亡くなったことにする。そして、その遊園地をユ克蘭ドという聖域にし、今まで以上に漫画やインターネットなどの二次元世界に傾倒していく。一方、縞子は彼を絶望させてしまった責任をとるため、自分が演じていた人格に近いと思われる二人の女性と一人のニューハーフを、ユ克蘭ドへ連れてくる。そして彼女たちにユクの性格などを教え込み、完璧なユクを作り出すことに専念する。ユ克蘭ドではトシロー、縞子、ユクたちの奇妙な同居生活が営まれていた。

そこへ小説家である琴音がスランプから逃れて来たことにより、ユ克蘭ドの世界にはころびが生じ始める。琴音を追いかけてきた後輩の詠子は、全員の前で縞子が本当のユクであるということ話し、トシローと縞子を糾弾する。トシローはパニックに陥りながらも、その現実を「(ユクでなく)縞子でいいや、もうオレ」と消極的に受け入れ、現実世界へ戻ることに決めた。一方、縞子は急に自分に優しく接するトシローに「もしかして私、優しいトシローちゃんのこと、幻滅していくかもしれない」と言い、話は終わる。

トシロー・縞子の人物的特徴を確認していこう。トシローは信じていたユクが、縞子が演じていた人格であったことを認められず、否定することでしか生きていけない。「ユクは俺の理想の子なんで。現実のあなたに汚されていくくらいなら、オレのユクはきれいなまま、そこで死なせてください」と

縞子を拒否し、「ユクは俺の聖なる女の子で、縞子は汚れきった現実の醜い女」であると自分に言い聞かせ、必死で現実を否定することで今の状態に耐えている。絶望の原因を、すべてを縞子のせいになければ耐えられない彼は<他者・社会への要求>が強いタイプである。

縞子は絶望させてしまった責任をとるためにトシローに尽くし、「トシローちゃん！ごめん、私ちゃんと思えますから！……だからそばにさせてください。お願い、私、ずっとトシローちゃんのこと……」と懇願していた。彼女にとって、トシローに拒否されることは耐えられないことであり、「彼を失望させてしまった責任をとらなければならない」と、トシローの要求に応えようと必要以上に自分に厳しくしている。責任の主体を自分に持って行く縞子は<自分自身への要求>が強いタイプといえよう。「乱暴と待機」の奈々瀬は、自分を犠牲にする方法で他人と関係を結ぶことを選択していたが、縞子はトシロー以外の相手には、自分を犠牲にしてまで尽くさない。彼女が自分を犠牲にしてまで、関係を結びたいのはトシローだけだからだ。つまり、トシローとの関係のために自己犠牲という方法を自分で選択しているといえる。しかし、後になって彼女は現実（縞子）を受け入れてくれたトシローに対し、「優しいトシローちゃんのこと、幻滅していくかもしれない」と伝える。縞子は現実を受け入れたトシローではなく、二次元の世界に傾倒していた、以前に自分が尽くしていた彼を求めていた。

前作の「乱暴と待機」では関係が一度破綻しても、新しい理由を作り出し共依存関係を修復することができた。しかし、「ファイナル」では共依存の理由は作り出さず、一方は現実を受け入れ、他方はその現実「幻滅していく」ことを暗示して話が終わる。

### ③「幸せ最高ありがとうマジで！」（以下「幸せ最高」と略記する）

小さな新聞販売所を営んでいる曾根家には再婚同士の夫婦と互いの連れ子（功一と紗登子）、住み込みで働いている女性えいみが暮らしていた。そこへ夫の慎太郎の愛人だと名乗る女、明里が乗り込んでくる。しかし、明里は愛人でもなんでもなく、慎太郎の本当の愛人はえいみであった。慎太郎は従業員と浮気し、妻美十理はそれを知りながら、二人のやりとりをただ盗聴し続ける。美十里は二人の関係を知りながら何もせず、夫と愛人と同じ屋根の下で生活を共にしていた。また、義妹の紗登子は義兄の功一にパンツを見せることで、彼をその気にさせ、自己顕示欲を満たしていた。

明里がやってきたことによって、曾根家の問題が明るみに出されていくが、曾根家の人たちによって明里の問題も露わになる。彼女は「人格障害」にも

関わらず、それを認められずに自分は「Monster」で他の人とは違う特別な人格障害である、と思いつもうとしていた。ただの人格障害にかかっていると認められない明里は、「不幸は無差別に起こる」、そして「私たちが幸せになれないことに、特に理由なんてない」と考え、曾根家を不幸にするためにやってきたのだった。

しかし夕刊の配達時間が来てしまったために、彼女はこれ以上曾根家の人々に相手にしてもらえなくなる。明里は曾根家の人々に糾弾されたことによって、自分の人格を彼らによって「改造されてやる」と決意する。

これらを踏まえた上で、明里・美十里の人物的特徴を確認していこう。明里は病氣（作中では「人格障害」とされる）にかかっているにも関わらず、それを認められずに自分は「Monster」で他の人格障害の人とは違うと思いつもむことで現実を拒否し、「自分が不幸なのに理由はない」と考えることで、今の状態に耐えようとしている。しかし、「頭もよくないし、家も新聞屋だし、母親に捨てられてるし、ストーカー体質だし」と自分を卑下する慎太郎の連れ子の功一に対し、「私は君みたいに絶望に値する理由がないわ。（中略）でも、いいじゃない。それだけレベル高い理由があるんだから。納得できるじゃない。私なんて、その理由すら思い当たらないのよ？」と語り、「理由ちょうだいよ。ねえ、そんなに持っているんだから、恵んでよ」と、実際は絶望する理由を欲していた。だが、自分が納得できるだけの理由が手に入らない明里は、不幸なことに理由はないとし、「……あんたたちが今日標的に選ばれたのにはね、……本当に一切の理由がないの。一切よ。たまたま目に入っただけで、あんたたち家族の人生が狂わされることになった。ねえ、この世には理由なんかないことがいっぱいあるのよ。いい加減、気づきなさい。不幸は無差別に起こるんだよ。私たちが幸せになれないことに、特に理由なんてないんだよ……！」と主張する。彼女は「自分が不幸なのに理由なんてない」とすることで「理由がないから自分には責任がない。だから何もしようがない」と自分以外のものに責任を転嫁し、「人格障害」という病氣から目を逸らし、医療機関にかかるなどの現実的な対処を怠っている。

そのために、明里はあえて「理由がない」という理由を作り出していると考え。自分の行為を正当化するために“私がこうであるのは～だからだ”といった理由を持つのは非常に強い。自分の言動がおかしい場合、頭の中で計算しても割り切れない余りが出てくるが、自分が納得できる理由があればその余りがリセットでき、破綻せずに済む。明里が自分で自分を正当化するには、このような理由が必要なのである。明里は、他人に責任を転嫁しているわけではないが、自己責任の考えはなく、他のものに責任を押し付けてい

ることから、〈他者・社会への要求〉が強いタイプといえる。

一方、美十里は多くのことに傷つき、自分の感情を出すことが面倒になり、夫やその愛人と話し合うことを避けて同じ屋根の下で生活を続けている。娘の紗登子に「一万回美十里」と呼ばれ、何があってもすべてなかったことにし、許し続ける性質を咎められた際も、「だってえ怒ったり憎んだりする分だけ損でしょ」と言い、現実を見ないようにしていた。慎太郎とえいみの関係が公になった時は、「私は……許しますよ別に。こんなことで逃げてもキリがないから。どこ行ったって同じなんですよ。よかったね、えいみちゃん。二人でこの人（慎太郎）、共有しようね」と言い、自分の感情を無視し、このおかしい現状を受け入れようとした。自分が耐えることで今の状況を乗り切ろうとする美十里は〈自分自身への要求〉が強いタイプといえよう。

上記のように三作品の登場人物たちは、何かしら理由（過剰な要求）をつけなければ、自分を正当化することも今の状況に耐えることもできない。また、すでに論じたように、「乱暴と待機」、「ファイナル」共に、〈他者・社会への要求〉、〈自分自身への要求〉が強いタイプの人物たちは、互いの要求を満たすために共依存関係を結んでいた。しかし、「幸せ最高」では人間関係を形成するために要求し合うことがなくなり、各自で独立・自己完結した要求を持っている。つまり、本谷は「ファイナル」以降、〈他者・社会への要求〉、〈自分自身への要求〉の一致で生じた共依存関係による人間関係を形成する手法をとらなくなり、各自に独立した要求を持たせるようになるのである<sup>9</sup>。その要求は他人だけではなく、「理由はない」などの漠然としたもの、あるいは、自分自身への内部へと向かっていく。そして、他人とコミュニケーションを図る機会も減少する。そのため、共依存関係を結べなくなった人物たちの人間関係は希薄の一途を辿っていき、思考の自己完結の度合いは高くなっていく。

### 三、過剰な要求＝非理性的ピリーフ

前項で触れたように、本谷の描く人物たちの持つ要求は、それぞれ現実に即しておらず、非常に主観的、感情的、他者依存的なものである。そして、何かしらの出来事（原因）があったために、自分たちは今このような状態にあり、それは仕方がないことなのだと主張する。

本稿では人物たちの持つこのような要求を、理感情行動療法(REBT)<sup>10</sup>の言葉を借りて「非理性的ピリーフ」と呼びたい。非理性的ピリーフとは、臨床心理学者のアルバート・エリス(A.Ellis)<sup>11</sup>が提唱した心理モデルの用語である。



アルバート・エリスによると、人間の感情と行動は、ABC 三つの枠組みで構成されているという<sup>12</sup>。起こった出来事を自分がどう評価するかによって感情と行動は生じており、ネガティブで不健康な自己評価を「非理性的ピリーフ」と言っている。

A (Activating event or Adversity) は、きっかけとなる出来事、または、直面する不快な状況のことである。B (Belief) は、きっかけとなる出来事に関する自分自身への語りかけ、C (Consequence) は、感情面と行動面の両方の結果をいう。例えば、ジョアンとジャックという友人が約束を破ったという A (きっかけとなる出来事) に対して、C (その結果) として「激しい怒り」が湧いたという、事例の枠組みをアルバート・エリスは以下のように述べている。

まず、C—感情の(あるいは行動の)結果(Consequence)—を突き止めることから始める。(ここではあなたの怒り)

次に A—起きている不運な体験や出来事(Activating event or Adversity)—を探す。(ここではジョアンとジャックがあなたとの大事な取り決めを守れなかったこと。)

A と C の関連を見たときに、A が C を引き起こしているように見えるかもしれない。しかし、REBT の理論ではあなたの体験が直接、結果である怒りの感情に寄与しているとしても、それが実際の原因ではないと仮定している。(中略) 注意深く A と C の関係を見てみよう。友人が契約を守れなかったことが、あなたの都合を大いに悪くさせ、失望させたということに気づくだろう—なぜならば、あなたの望んでいることを妨げているからだ。しかし、彼らの契約解消ということだけが、必ずしも友人に対する怒りの感情に導くとは限らない。

なぜなら、もしあなたの怒り C が、A からの直接の結果であるならば、いかなる特定の A に出会っても、いつでも C で同じ感情を持つことにならなければおかしい。しかし実際はそうではない。(中略) 感情の結果は、起きている出来事に影響を受けることはあっても、そこから直接的に引き出されるものではないのである。<sup>13</sup>

つまり、結果(C)はきっかけとなる出来事(A)によって引き起こされるものではないということである。結果を引き起こしているのは自分自身への語りかけ(B)であり、出来事(A) = 結果(C)という図式は成り立たない。そして、自分自身への語りかけ(B)には理性的ピリーフ(Rational Belief)

と非理性的ビリーフ (Irrational Belief) の二種類が存在するのである。

自己評価によって生じた感情・思考がポジティブなものならば問題はないが、ネガティブで、なおかつ不健康なものである場合がある。同じネガティブな感情が生じたとしても、理性的ビリーフが強ければ「失望、後悔、欲求不満など」で済み、非理性的ビリーフが強ければ「うつ、パニック、激怒、自己憐憫、低い欲求不満耐性など」が生じる。強い非理性的ビリーフを持つと、感情をかき乱し、不安や怒りを大きくし、鬱をひどくし、適応性のない行動を取ってしまう。さらに、エネルギーを奪い、問題のクリエイティブな解決法を見出す妨げにもなる。これを非理性的ビリーフといい、出来事 (A) = 結果 (C) という思考によって主観的な感情に縛られた状態を指す。

非理性的ビリーフの特徴として、自己評価によって生じた感情・思考に、「～しなければならない」、「～でなければならない」(should) という絶対的な義務が発生する。そして、その要求が果たされなければその状況に「耐えられない」、もしくは、自分の掲げた should を達成できない「自分には価値がない」というような思考が生じる。そのため、非理性的ビリーフを持った人間は、その should を達成するために躍起になる。

前述してきた本谷作品に登場する人物たちの思考も、出来事 (A) = 結果 (C) という現実に対応していない、感情に縛られた主観的なものであり、ビリーフを盲信することで、低い欲求不満耐性を生じさせている。彼女たちの持つ過剰な要求は非理性的ビリーフといえるのではないか。

#### 四、各人物たちが抱える非理性的ビリーフ

まず、〈他人・社会への要求〉が強いタイプの過剰な要求を確認していく。「乱暴と待機」の英則の言動からは「自分の人生がうまくいかないのは奈々瀬によって狂わされたからであり、すべて奈々瀬のせいではない」。そうであれば耐えられない、「ファイナル」のトシローの言動からは「私が現実世界を受け入れられないのは現実世界 (縞子) がケガれていて、二次元 (ユク) が神聖なためではない」。そうであれば耐えられない、「幸せ最高」の明里の言動からは「私が人格障害者であるのに理由はない。そうであれば耐えられない」という過剰な要求が読み取れる。

以上のように、人物たちのもつ過剰な要求には、非理性的ビリーフの特徴である should や「耐えられない」という感情が読み取れる。このことから、人物たちの持つ過剰な要求は非理性的ビリーフであるといえるだろう。本谷は、共依存関係を解消した「ファイナル」以降、「～のせいだ…なんだ」、「～のために…しなければならない」という共依存関係を結ぶのに適した過剰な

要求を持った人物を描かなくなった。すなわち、人物たちは共依存関係を結ぶための非理性的ピリーフを持たなくなった。そのため、人物間のコミュニケーションが希薄になり、非論理的な自己完結の思考がより強まっていく。非理性的ピリーフを持つことで、責任を放棄している彼らは、非理性的ピリーフを自己責任放棄の免罪符として利用している。非理性的ピリーフによって苦しんでいるものの、責任を放棄するための免罪符としての役割の方が大きく、自ら積極的に非理性的ピリーフを持つことで自分を守っている。彼らは自己防衛的な自己愛が強い人間といえる。

次に、＜自分自身への要求＞が強いタイプ、『乱暴と待機』の奈々瀬の言動からは「私は人に嫌われないように自分の本心を隠して生きなければならない。そうでなければ耐えられない」、『ファイナル』の縞子の言動からは「私はトシローのユク像を壊して彼を幻滅させてしまった責任をとらなければならない。そうでなければ耐えられない」、『幸せ最高』の美十里の言動からは「本当の自分をさらけだしてひかれてしまう位なら、自分の本心を隠して相手に合わせるべきである。そうでなければ耐えられない」という過剰な要求が読み取れる。

前述したように『ファイナル』以降、人物たちは他人と共依存関係を持つなくなる。それは、“～のせいで…なんだ”、“～のために…しなければならない”といった過剰な要求、すなわち非理性的ピリーフを共有できなくなるからだ。そして『乱暴と待機』の奈々瀬、『ファイナル』の縞子たちの主張していた「～のために」という枠組みがゆるみ、『幸せ最高』では「自分のために自己を犠牲にする」というシンプルなわかりやすい自己愛の形に変化していく。

以上のことから、どちらのタイプも自分を守るために、非理性的ピリーフを作り出していたといえる。登場人物たちは、初期作品では現実を受け入れられずに苦しんでいたが、後期では現実を受け入れ、他者によって満たしていた非理性的ピリーフを解消できるようになる。しかし、その受け入れ方は非常に感情的・依存的で、非理性的ピリーフによる共依存関係を解消しただけであり、自分がそのような状態であることを何かのせいにしたり、自己完結して他人と話し合うことを避けたりと、合理性は全く見られず感情に溺れ、苦しんでいる。トシローのように、感情を棄てたケースも存在するが、その後、実際に非理性的ピリーフを持たずに生きていけるのかは危うい。そして人物たちは理由を探し求め、新しい非理性的ピリーフを手に入れようと必死になる。どちらのタイプも非理性的ピリーフの本当の解決には興味がなく、論理的な思考力・想像力が欠如している。彼女たちの持つ非理性的ピリーフは自

分を守るための思考であり、自己防衛的な自己愛から生じたものであるといえる。しかし、どちらのタイプも現実（ありのままの自分）をすんなりと受け入れられるような自己愛は持ち併せていない。

## 五、終わりに

人物たちの生みだす非理性的ビリーフは自己防衛的なものであり、他人ではなく、自分のために生じさせていた。＜他人・社会への要求＞も＜自分自身への要求＞も突き詰めていけば、自分自身を守るための要求であり、これが本谷作品における過剰な自意識を持つ人たちの根底に流れる思考である。本谷の描く人物たちは自分を守るために、自己完結した主観的な世界に逃げ込んでいた。人物たちは自己防衛的な強い自己愛を持っており、それが過剰な自意識に繋がっているといえる。人物たちはこのような自己防衛的な自己愛を持っているため「自意識に絡めとられ」、より自己完結の思考に陥ってしまう。そのために自己完結というよりは、もはや「妄想過多」になってしまっている。

しかし、本谷の描く人物たちは、非理性的ビリーフが破綻しても、決して死を選ぶことなく、苦しみ、もがきながらも生き抜こうとする。どんな小さな光でも（たとえそれが非理性的ビリーフだとしても）、自分で生き抜く道を見つけ出し、生きようとする、ある意味前向きで逞しい姿に読者や観客は惹きつけられると考える。たとえ、すぎるものが非理性的ビリーフだとしても、自分たちの人生を決して捨てることのない登場人物たちの生き様こそが、本谷の描く作品世界の大きな魅力なのである。

- 
- 1 小説『腑抜けども悲しみの愛を見せろ』（二〇〇五年）第一八回三島由紀夫賞候補、小説『生きてるだけで、愛』（二〇〇六年）第一三五回芥川龍之介賞候補、『遭難、』（二〇〇七年）第一〇回鶴屋南北戯曲賞受賞、小説『遭難』（二〇〇八年）第二一回三島由紀夫賞候補、『幸せ最高ありがとうマジで!』（二〇〇九年）第五三回岸田國士戯曲賞、小説『あの子の考えることは変』（二〇〇九年）第二一回三島由紀夫賞候補、小説『ぬるい毒』（二〇〇一年）第三三回野間宏新人賞、第一四五回芥川龍之介賞候補
  - 2 本谷有希子（インタビュー：島崎今日子）「現代の肖像 本谷有希子 劇作家」『アエラ』二二（三七）二〇〇九年 五七頁
  - 3 「女の病気シリーズ」と名前がついたのは第二回公演からである。  
第二回公演 女の病気シリーズ②『死ぬ気ね』（二〇〇一年）  
第三回公演 女の病気シリーズ③『ファイナルファンタジー』（二〇〇一年）  
第四回公演 女の病気シリーズ④『反感の嵐』（二〇〇二年）

- 第五回公演 女の病気シリーズ⑤「フィクショニア」(二〇〇二年) ※劇団、本谷有希子 第十三回公演「廻路」パンフレット(二〇〇七年)より
- 4「劇団、本谷有希子 WEBSITE」(オンライン) < [http://www.motoyayukiko.com/whats\\_theatrical/](http://www.motoyayukiko.com/whats_theatrical/) > (二〇一一年一〇月六日閲覧)
- 5 本谷、(注2 前掲雑誌) 五四-五八頁
- 6 本谷、(注2 前掲雑誌) 五八頁
- 7 本谷、(注2 前掲雑誌) 五七頁
- 8「乱暴と待機」「せりふの時代 冬号」二〇〇五年 二二三頁 ※ ( ) 内横尾補足
- 9 管見の限り、「ファイナル」から後の作品、例えば「廻路」(二〇〇七年)、「幸せ最高」(二〇〇九年)、「来来来来」(二〇〇九年)では、そうした傾向が指摘される。しかし、まだ詳細な考察、研究は進んでいないので、ここではそうした傾向が指摘されるという表現にとどめておく。
- 10 臨床心理学者アルバート・エリス (A.Ellis) が自身の臨床研究と実践から作り出した心理モデル。REBTの原理は心理学だけでなく、エリスが趣味としていた哲学の基本部分も加えられている。※アルバート・エリス、レイモンド・C・タフレイト著 野口京子訳、「怒りをコントロールできる人、できない人 理性感情行動療法 (REBT) による怒りの解決法」金子書房、二〇〇四年、奥付より引用。
- 11 コロンビア大学の臨床心理学の修士号及び博士号を取得した。(中略) 理性感情行動療法 (REBT) の創始者である。ニューヨークでREBT 研究所を主催する。※アルバート・エリス、レイモンド・C・タフレイト (注9 前掲書) 奥付より引用。
- 12 以下、アルバート・エリスのABC理論、非理性的ピループについては、すべてアルバート・エリス、レイモンド・C・タフレイト (注9 前掲書) を参考にした。
- 13 アルバート・エリス、レイモンド・C・タフレイト (注9 前掲書) 三八-三九頁  
(文教大学大学院 言語文化研究科 地域言語文化研究コース 修士課程修了)